



実際にはビルと僕とスティヴがそこにいて、これ以上ないくらいにいい感じのサウンドになった。でもスタジオでの録音は、人生で最も骨の折れる夜だったね。この小悪魔に11時間も取り組んだんだけど、信じられるかな——ある時点で僕は神を見つけて、さらに、リッキーが四つんばいになって、目に見えない鳩を追いかけている姿を見たんだよ。ビルと僕は午前6時45分にヴォーカルを吹き込んで、ギターを追加し、他の連中もそれぞれの楽器を演奏した。僕がすべてをちゃんと覚えていればの話だけだね。とにかく、いい感じに仕上がったと思うよ。自分で聴いてみて、歯ざりにはしていないから。今のところはね……。

● TAKE THIS HEART

この小気味よい曲は、歌やレコードとしてはこれ以上あり得ないくらい、自然に生まれた物だ。僕が何か他の曲のキーをじっくり考えていた時に、ジェリーがスタジオAに飛び込んできたの

を覚えてる。そして、車でそこまで下ってくる途中——いや、登ってくる途中だったかな——まあどっちでもいいけど、とにかくあるフックを思いついたって言ったんだ。「フック」というのは、曲作りに関わってる人なら知ってるように、聴いた時に耳に残る部分、あるいは少なくとも、それを意図して書いた部分を指す。で、彼が持ってきたのはまさにそれで、結局、僕がジェリーの肩をバンバン叩きながらブリッジ（中間の8小節）を書き上げたせいで、それから1週間、彼の肩には青あざが残っていた。僕らはあつという間にこれを録音したんだけど、あまりにもいい感じに仕上がったから、ブリッジに大砲の音を少し入れてみることを全員一致で決めた。そうすれば、僕らがちょっとした荒くれ者にもなれるということ、をそれぞれ確信できるからね。

● GOODBYE BLUES

ビルに教えられて知った曲で、僕もこの雰囲気大好きになった。実は彼は自分で電子ピアノを弾きながら、生でこれを歌ってくれたんだ。彼のキーでね（あれが彼にとっては唯一のキーなのかな？）。でも念のために言っておくと、ジミー・サイターと僕もパーカッションを演奏したんだ。実を言うと、リッキーのハイハットは僕をしばれさせる。この言葉で彼ののぼせ上らないことを祈ろう。ちゃんと演奏を終えてくれるまではね。でないと、彼がどういふ演奏をするか、僕には分かる気がする。きくと彼は僕に背を向けて、全然違う感じの演奏をして、僕を追い払うんだ。可愛そうな僕！（心の底で、僕はずっとドラマーになりたいと思ってた）。ブライアンが素敵なベースのラインを考案出したんだけど、ジョンと僕は、****（原文、判読不能）でそれをダブルにすべきたと思った。スティヴが当日エレキを弾き、後でビルが新たな音を付け加えた。僕は結局ビルのパートを歌ったんだけど、後にそれが低音であることが分かって、コーラスの部分では高音のハーモニーも歌わなければならなかった。2テイクで録ったにしては、悪くないと思う。

● BEDTIME

ジェリーがこの美しい曲の最初のパートを書いて聴かせてくれた、僕が大いに気に入ったもんだから、僕に、曲を仕上げられるように頼んだんだ。あるいは僕が彼に頼んだのかもしれない。とにかくそんなわけで、ある日の早朝、リッキーを家に呼んで、エンシーノにある僕の古い家で、お日様が昇る頃、二人で中間の部分を書いたんだ。グロリア、ブルース、サイラス・ファーマー、ジョン・ジョイス、そして僕が、中間部における天使のようなバックコーラスをこどもも担当した。わざわざチェロを取り出して素敵な旋律を弾いてくれたジョン・ジョイスに、特にお礼を言いたい。彼はもっと頻繁に演奏すべきだと思うな。それから、僕が歌う時にピアノを弾いてくれたジェリーと、タンバリンを3回叩いてくれたリッキーにも感謝。ありがとう、みんな。ジミー・サイターのタンバリンと、スティヴ・ロスのリード・ソロに、僕の心は再びかき乱された……ブルース・ジョンストン、ジム・ハース、ジョン・ジョイス、そして僕（言うまでもないよね）がバックিং・ヴォーカルを歌い、後で僕がヴォーカル、つまりリードを歌った。中間部はほとんどが僕ら全員によるヴォーカルで、確かサイラス・ファーマーがヴォーカルに関してちょっとした助言をしたと思う。ブルースがオルガンを弾き、キーボードの大部分をジョン・ホプスと一緒に演奏し、鐘とフィールド・ドラム（訳注：マーチング・バンドなどに使用される大きめのスネア・ドラム）も叩いたはずだ。僕がほんの少しだけ手伝って彼が手がけた中間部のヴォーカル・アレンジは、称賛に値すると思う。残りの大部分についてはもちろん忘れてしまったか、あるいは即興的な演奏だった。ただ一つ確かなのは、これがベストな作品、あるいは少なくとも、僕が今まで録音した中で最高のお気に入りの一つだということだ。手伝ってくれたみんなに、もう一度ありがとうと言いたい。僕らはみんな、君たちが大好きだ。

DAVID CASSIDY

翻訳：野村伸昭

DAVID CASSIDY HOME IS WHERE THE HEART IS

RCA移籍第1弾となった前作『青春のポートレート』（1975年8月）に続き、1976年4月に全米リリースされた『青春の館』（通算6作目）が33年の時を経て、最新リマスター／紙ジャケット仕様の国内盤として甦った。今回、同時発売されるRCAでのサード・アルバム『恋の大通り』（アメリカ未発売）同様、世界初CD化の快挙だ。

本作のレコーディングは、前作と同じくブルース・ジョンストンを共同プロデューサーに迎えて行なわれた。ジョンストンは、50年代、十代の頃からミュージシャンとして活動、ソングライター、プロデューサー、シンガーとして、60年代のミュージック・シーンで多くのヒット曲を放ち、ブライアン・ウィルソン不在時のビーチ・ボーイズのメンバー（65年〜72年）として大いに活躍したヴェテラン。昔からビーチ・ボーイズの大ファンだったキャシディは、前作『青春のポートレート』を制作する際、ジョンストンにプロデュースを依頼。友人でもあるエルトン・ジョン74年のヒット曲『僕の瞳に小さな太陽』のコーラス・アレンジをジョンストンが手がけていたことも彼を指名する決め手になったのかもしれない。『青春のポートレート』のレコーディング作業を通じて、制作パートナー、コーラス・アレンジャーとしての彼に全権の信頼を寄せるようになっていた。

アルバムに正式な記載はないが、本人のライナーノートにも出てくるように、レコーディングは前作同様、ハリウッドのRCAスタジオで行なわれた。海外の様々な資料にコロラドのカリブ・ランチでの録音という記述があるが、誤り。本作と同じ1976年にカリブ・ランチで録音された次作『恋の大通り』がアメリカで発売されなかったため、混同されたものと思われる。

キャシディ本人は、リード及びバックグラウンド・ヴォーカルのほか、ギター、キーボード、パーカッションを演奏。ブルース・ジョンストンは、キーボード、コーラス・アレンジ、バックグラウンド・ヴォーカル、パーカッションを担当した。ビル・ハウス（ギター、バックグラウンド・ヴォーカル）、ジョン・ホプス（キーボー